

20周年記念 コムズフェスティバル 市民企画分科会 実施報告書

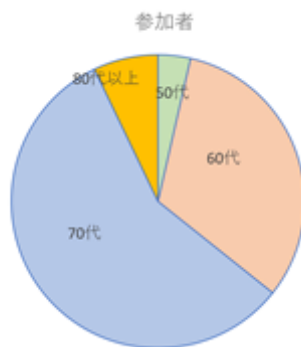
| | |
|-------|---|
| グループ名 | ウエルエイジングクラブまつやま |
| 開催日時 | 2020年2月12日(水) 10時～12時20分 |
| テーマ | 「その時、わたしは… ～最終章の決断～」 |
| 形式 | ワークショップ・トーク&トーク |
| 講師等 | 問題提起：WACMメンバー4人 講師：矢川 ひとみ さん(愛媛県介護支援専門員協会会長) |
| 参加人数 | 合計 43名(女性36名, 男性 7名) |
| 実行委員数 | 合計 8名(女性 8名, 男性 0名) |

〈内容〉

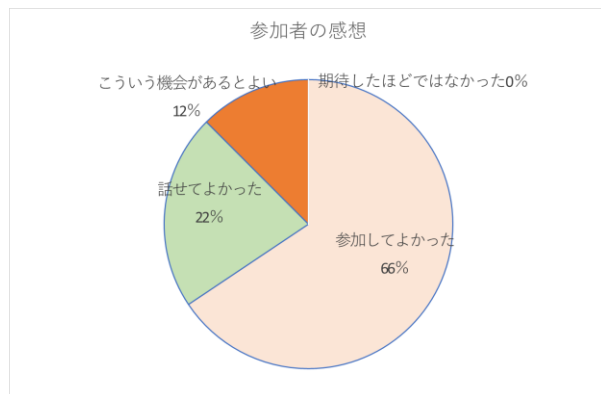
人生100年時代を迎えた。長寿を慶賀しつつも家族環境・社会環境の変化の中での長寿とその果ての最終章に思いを馳せざるを得なくなった。

本分科会では、最終章に遭遇する4つの事象、①施設介護か在宅介護か、②延命治療について、③残存能力を活かした介護とは、④下の始末ができなくなったときをテーマに、その時々々の決断の要件を体験者が問題提起し、それに実務経験者から現状とアドバイスを頂戴した。その後、参加者それぞれが自分の現状をもとに「自分の尊厳を自分の手で確保する」ためにどのような決断をしていくべきかを模索した。

〈参加者の状況〉



〈参加者の声〉



〈参加者の主な感想〉

- ・人生の最終章を真剣に考えている人たちとの出会いが貴重であった。
- ・最終章については気になっているが話し合う場がなかった。話し合えてよかった。
- ・夫と参加した。夫の意思がわかってとても良かった。
- ・同世代の方々の最終章についての考えを聞くことができてとても参考になりました。
- ・自分の気持ちを家族に話す機会を持ちたい。
- ・参加者の意識の高さが印象に残った。主体的に生きることの大切さを学んだ。



- ・親のこと自分のこと、今後起こりうることについて考えるきっかけになった。
- ・いずれを選択するにしても覚悟が必要であることを学んだ。
- ・60代後半、いかに生活面で自立してなかったかを反省。

〈まとめ〉

長寿は最終章への不安を増幅する。核家族化が進み、子らの生活支援や介助が期待しにくくなっている。特に女性は男性より平均寿命が長いだけに最終章での一人暮らしが想定される。そうした中で、いかに高齢者がそれぞれの尊厳を確保しつつ最終章を過ごすか、4つのテーマをもとに参加者が話し合い、学びあった。

長年介護の現場に携わる講師が指摘したのは、今回提示した4つの事象にかかわらず最終章の決断の条件はそれぞれの「覚悟」そのものであった。

問題提起した4つの事象について講師の指摘をまとめると

① 施設介護か在宅介護か

施設介護を受けるにはそれなりの条件が必要となる。在宅では暮らしきれない場合、包括支援センターの判断により施設利用が検討される。施設介護は食・住・ケアと24時間職員の目が届く安心がある反面、共同で暮らす以上様々な制約やルールがある。一方、在宅介護を選択する場合、24時間の安心は得られない。サービス内容にも限界がある。いずれを選ぶにもそれなりの覚悟が必要となる。

② 延命治療について

本人の意思は尊重するものの最終の決断は家族に委ねられることが多い。元気なうちに託すべき人にしっかりと自分の意思を伝えておくことが必要となる。

③ 残存能力を活かした介護とは

残存能力を活かす介護のあり方が少しずつ尊重されるようになってきているが、施設の方針や本人の安全優先から必ずしも介護の現場では実現されてはいない。しかし、本人の強い意思により不自由さと向き合って覚悟を持って在宅で過ごし続ける人もいる。

④ 下の始末ができなくなったとき

下の始末ができなくなった時、施設介護を考える人は多い。しかし、今のように介護用品も進歩著しい時代ではその現実を受け入れて対応策を整えることができる。要は、自分の老衰や老化の現象にしっかりと向き合い、必要な支援を得ながら生きることが可能な時代となっている。要はそれぞれの事象に向き合い受け入れる覚悟が求められる。

老いてなお生き、自分らしく旅立つには自分がそれぞれの事象をどう選択し、自分の人生をどう始末したいのか、まずは「自分」の現実と向き合い、心の準備を進め、「覚悟」を持つことの大切さを学ぶ機会となった。

今回は男性の参加者が今までより多く、男性の老いへの意識がようやく主体性を帯びてきたことを実感することができた。

これまで「死」や「最終章」はタブーと考えられてきた。しかし、今まさに私たちは多死社会を生きている。それも孤立無援の状態すら看過される。血縁も地縁も薄れる中で、どう最後まで一人一人の尊厳を保ちつつ旅立つか、その地点までをどう生き抜くか、それをどう支え合うことができるのか、私たちは背負いきれないほどの課題を本分科会で再確認するとともに、私たち世代の役割として、その改善や緩和に向けてもうひと仕事が残されていることを実感することになった。